

「開国」の比較思想史

平石 直昭

今年度のこの科目では「開国」の比較思想史」と題して、四月一日から七月一九日まで一三回の講義を行ない、七月二二日に試験をした。

中国、朝鮮、日本の東アジア三国は一九世紀半ばにいわゆる「西欧の衝撃」をうけたが、それに対する対応の仕方は各国で異なった。日本はいち早く「開国」し、明治維新を遂行して近代化を進める体制を作っていった。しかし逆のそのことが改革を不徹底にさせ、二〇世紀半ばの敗戦と今日まで続く問題を遺したという面がある。この講義では、こうした「開国」が日本に与えた思想的な衝撃とその遺産について考えることを目的とした。「開国」をキーワードにしたのは、敗戦後の状況が丸山眞男によって「第二の開国」と呼ばれたのにつづいて、冷戦終結後の今が第三の開国といわれる状況があり、そこで一九世紀半ばの「開国」を検討することで、現代日本の問題を考える示唆を得ようとしたわけである。

授業の方法としては、ほぼ毎回、A4用紙で一〇枚前後の講義原稿を用意し、プリントして配布した。それを読みあげたり敷衍したりするやり方をとった。徳川時代から明治初期までの思想史とその背景が主な対象なので、講義であつかう言葉や観念には、現代の学生には馴染みのないものが多く、漢字もあまり見なれていないものが多い。それを一々黒板に書いていては時間が取られてしまう。また当時の人間がどのような思考の回路で物を考えていたか、その価値観はどうかについても、講義でいきなり聴くだけでは分かりにくいだろうと思われる。高校までの教育では殆ど勉強してきていないはずだからである。そこで以上のようにプリントを配布したわけである。この配布は、復習のためにも役立つということ为好評であり、こちらも苦勞した甲斐があったと喜んでいる。

第一回目の講義では、講義で扱う時代と基本的な問題関心について述べ、第二回は近世日本社会の比較的分析、第三回以後は近世主要

思想として朱子学、仁齋学、徂徠学の順序で概観し、ついで近世後期の思想状況、さらに一九世紀半ばの「西欧の衝撃」への反応―比較史的分析、思想的反応の諸相、幕末維新期における「天」の意味転換、福沢諭吉の思想形成、東アジア国際秩序の再編と「アジア主義」、という順序で講義した。当初予定していた天皇制国家の形成と韓国併合の問題は、残念ながら時間の都合で扱えなかった。

受講者は社会人が三〇名、登録学生数は二三名で、受験した学生は二二名である。二名が全くの不勉強で不可をつけざるをえなかったが、後は大体のところは分かってくれたようである。社会人の中には義務ではないにも関わらず、自発的にレポートを提出した方がおられた。ここからも窺えるように、総じて社会人の方が熱心で、質問も多く出された。人生経験が長く歴史の諸問題に対しても自分の意見をお持ちのせいもあろう。講師としては、何らかの形で、社会人聴講者と一般学生の交流の機会を持つことができればよいと思った。そうした機会があれば、女子大に対する社会的な認知も高まるであろうし、学生側でも教師以外のシニアの方々の色々な意見にふれる機会がふえて、一石二鳥ではないかと考えたからである。(二〇〇六、八、二二)